



ペシャワール会 現地代表のアフガン報告

中村 哲 医師

2007年10月23日

現場を知らない、とりわけ現地で何が起こりつつあるか知らない議論は生産的でない。テロ特措法の11月1日以降期限切れまでほぼ1週間という時点で、中村医師の話を聞くことができた。1984年以来ずっと、1年の大半を現地の農山村で医療・灌漑活動にたずさわってきた中村さんの報告は、インド洋上の給油活動に賛成の人にも、反対の人にも、分からないという人にも、まずは一読していただきたい。その後で中村さんの長年の観察にもとづく見方と提案を、それぞれもう一度考えてみてはどうだろうか。

© 日本記者クラブ

1週間ほど前に日本に戻ってきました。テロ特措法をめぐって国内でいろんな議論が沸騰しているということが、最近になってやっと分かってきました。私の持論ですが、一体、いま現在、何が現地で起こりつつあるのかということの認識なしには、やはり議論というのは成り立たないのではないのでしょうか。6年前にも似たようなことを話をしたことを覚えておりますけれども、簡単に私たちの過去の活動を紹介いたしまして、きょうはできるだけ、これはどうなっているんですかといった具合に質問をしていただきたいと思います。私は日常的に向こうにいますので、当然と思っていることが、日本では通用しないということがしばしばありますので、何なりと忌憚なくお願いいたします。

私たちの活動は、ペシャワール会という名前のように、パキスタンの北西辺境州北部にありまして、アフガニスタン、パキスタン、両国にまたがって活動を続けております。現地にPMS（ペシャワール会医療サービス）という組織があります。これが厳密にいうと現地の活動母体で、福岡市にあるペシャワール会がこの基金母体という関係です。アフガニスタン、パキスタン両国の医療活動がもちろん中心でございます。

現在、アフガニスタンは大干ばつの真っ最中。このところずっと右肩上がりで行進中でありまして。それで、私も、ジャジャラバードというアフガニスタン側の町に拠点を置きまして、水源確保事業に取り組んでいます。

これに携わる職員が約200名、日本人ボランティア・ワーカーが約20名、それから現地の臨時作業員を入れますと、多いときで約1,000名の人々が、この活動に従事しております。これを支えるペシャワール会の会員が約2万名。年間3億円の予算はすべて募金によって成り立っております。

アフガニスタンという国は、地図上の面積は日本の約1.7倍です。人口は約2千数百万人だとい

うふうにいわれております。この人口の約8割以上が農民です。遊牧民を入れますと9割以上になります。すなわち、農民及び遊牧民の農業国家だということができます。

日本の皆さんがしばしば映像でみますアフガニスタンの実情というのは、ほとんど大都市に限られたものが多いと思います。しばしば多くの人々の現実が伝え切れていない、という感じをどうしても抱かざるを得ないわけです。

谷ごとの自治性と割拠性

ヒンドークシ山脈というのは、東のネパールから続きまして、世界の屋根といわれる地域の西の端を形成している。アフガニスタンの国土のほぼすべてとっていいぐらいが、このヒンドークシ山脈、及びその支脈によって占められています。これがどういうふうにこの国の人々の生活に影響を与えるかといいますと、谷が深いために、谷ごとに国があるといっていいぐらいバラエティーに富むのです。

あの地域はシルクロード時代、民族の十字路口と呼ばれたところであります。分かっているだけで20以上の民族がそれぞれ割拠、対立はありながらも、全体としてアフガニスタンという一つの天下を形成している地域だと考えてさしつかえない。

ですから、ちょうど戦国時代の日本によく似た状態であります。京都がどうなろうと、関東には北条、今川があり、中部では武田、上杉がありというふうな状態です。それぞれの地域が、悪くいえば割拠性、よくいえばそれぞれの地域の自治性を保ちながら、全体としてアフガニスタンという国をなしてある、この事情がなかなか伝わりにくいのです。

雪がなければ食っていけない

ヒンドークシの山の雪というのは、アフガン

人にとって生命線であります。農民及び遊牧民が圧倒的多数ですので、こんなことわざがあるくらいです。「アフガニスタンでは金がなくても食っていけるけれども、雪がなくては食っていけない」。アフガン農村では、ほとんどが自給自足のところが多い。商品経済も一部に入っておりますけれども、これはごく一部の現象であるといっていいいぐらいで、自分のものは自分でつくるという気風が徹底したところです。

あの乾燥した中央アジアに位置して、2千数百万名の人がどうして食べていけるかというと、白い山の雪のおかげなのです。冬に降り積もる万年雪、それから何万年もかけてできた氷河が夏に溶け出してきまして、川沿いに豊かな実りを約束してくれるということです。人も動物も植物も、何千年も何万年も、こうやって命をつないできた、こういった地域なのです。

現在、最も深刻なのは、この白い山の雪が年々消えつつあるということなのです。地球温暖化現象と密接な関係があります。洪水はふえるけれども、洪水でどっと溶け出した後はカラカラになる。近年、特に2000年の夏以来、つねに右肩下がりで干ばつが進行している。このままいきますと、専門家の分析によりますと、10年、20年を待たずしてアフガニスタンの人々が生きていく空間の半分は消滅するであろうともいわれています。これがアフガンの人たちにとっての本当の恐怖であります。

戦争ももちろん悲惨ですけれども、それ以上に深刻なのが、人々が生きていくための基盤を失うということ、これがアフガニスタンにとって最大の危機なのです。戦争どころではないという状態です。

さらに、イスラムということについて、これがどうしても日本人にはわかりづらい。メディアを通してしかイスラムという言葉に接する機会が少ないので、イスラムというと、伝えられるのが内戦、

自爆テロ、内乱、テロ事件と暗いニュースばかりであります。けれども、現地にいて私が思いますのは、日本のその辺を歩いているおじさん、おばさんとちっとも変わらない普通の人たちだということなのです。

「イスラム」は部族集団の接着剤

2千数百万人のアフガン人のほぼ100%近くがイスラム教徒です。それも、おそらく現存するイスラム社会の中で最も古典的で保守的なイスラム教徒です。保守的であれば過激かということ、必ずしもそうでもない。現地でイスラムというと、重要なのは、単に個人的な信心というだけではなく、先ほどアフガニスタンの自治性、割拠性が濃厚だといいましたけれども、このばらばらの地域、あるいは部族集団をつないでいるのがこのイスラム教なのです。首都、大都市などの点と線を離れますと、ほぼ面の世界で地方の自治が行われております。警察もいなければ精神病院もないという世界なのです。どうして治まるかというと、各地域の自治体の中心にモスクがありまして、ここが自治の中心となっている。いろんな地域のもめ事などはすべて自分たちで解決する。こういう国であるわけです。

この状態が、議会制民主主義を立てる国と根本的に違うわけです。いわば飾り物といえば語弊がありますが、対外的な表看板として議会制度などがありますけれども、これはほとんどのアフガン農村社会では通用しないということなのです。

最近は都市に行きますと、貧富の差がはなはだしい。私たち医療関係者が胸を痛めますことは、たとえば、日本の進んだ医療技術を向こうに持っていくことは決して悪いことばかりではないと思いますけれども、その恩恵に浴せる人々はごく一握りであるということなのです。またごく一部の人は、病気になればロンドンや東京やニューヨークに簡単に飛んでいって治療を受けることがで

きる。一方で、99.99%の人は、数百円といわず数十円の薬が買えなくて死んでいく。こういう状態の中で、私たちとしましては、いかに少ない資金で、いかに多くの人々に恩恵を及ぼすかということに特別な配慮をせざるを得ない。そういう社会でもあるということです。

私たちの活動は、1984年、ペシャワールで発足いたしました。ライ・コントロール5カ年計画。ライはハンセン病と現在では呼ばれておりますけれども、これに私が参加するという形で始まりました。

最初は聴診器1本とピンセット数本

当時、2,400名の患者が登録されておりました。私の任務は、この患者に対する治療センターの充実ということでありました。けれども、行ってびっくりしたのは、この2,400名に対してベッド数はずか16床。医療器具もろくにありませんでした。今でも忘れられませんが、耳にはめるとけがをする聴診器が1本。それから、ねじれたピンセットが数本という状態でした。ハンセン病はただ薬をやれば治るという病気ではなくて、目や神経をやられますので、整形外科、形成外科、眼科、皮膚病学、神経病学など、いろんな分野が合わさって「ライ病学」というのをつくっております。特別なケアが必要な病気です。それに対してまともなケアができなかったということなのです。

さすがに、この状態を見てショックを受けました。医療は物や金ではないという精神論も聞きますけれども、私たちとしては、いや、物や金も必要なんだということで、ペシャワール会の活動が活発化して、現在に至っております。

現在では、ほぼハンセン病に関する合併症治療をこなすことができるようになりました。アフガニスタン全土、それからパキスタン北部で唯一のハンセン病合併症の治療の場として、現在登録されております。7,000名のハンセン病患者の強力

な後ろ楯となっておるわけです。

こういう話をすれば、私が医者で、医療活動をやっているということが分かっていただけたと思いますが、実は、私たちの活動の大部分は、一見医療とは無関係のところにとんどのエネルギーを費やしてきたわけです。

今でも苦労することの最大のものは、いかにして現地の人々の気持ちを理解するかということなのです。これは医療関係ならば当然のことでありまして、患者が一体何を訴えたいのか、何が苦しいのか、何が悲しいのか、どうしてほしいのか、何がうれしいのかということを知らないと、治療関係というのは成り立たない。

しかし、一口に相手の気持ちを理解するといっても、これは簡単なことではありません。もう30年近くも一緒にいる家内の気持ちでさえいまだによく分からないのに、言葉も違う、文化も違う、風習も違うというところに行きまして、さあ、何かしようといっても、そこにはやはり行き違いだとかが生ずるのは当然です。これにはやっぱり長い時間と忍耐がいるのです。

文化の相違は優劣、善悪と無縁

ごく一例を挙げますと、女性のかぶりもの。現地の男女隔離の習慣というのは非常に厳しいものがありまして、例えば女性患者が来ると、日本だったら胸をはだけて聴診器を当てることが出来ますけれども、現地でそんなことはできない。非常に不道德な行為として見られるということがあります。そのために、女性患者が置き去りにされる。こういった状態をみて、外国人が犯しやすい過ちといいますのは、こういった文化、風習の違いを、単に違いであるものを、優劣だとか善悪のカテゴリーに分けて裁いてしまうという事態が起こってまいります。

かぶり物につきましては、ちょうど6年前、タ

リバンがブルカを強制したのだ、していないのだということで大議論が、日本でもおこりました。けれども、いまでもブルカを脱いでいる女性はほとんどおりません。これは実は現地の慣習であったわけです。

私たちは、こういった慣習、好き嫌いの問題がありましても、これを一切善悪あるいは優劣の問題として決めつけをしないということを一つの方針といたしました。その文化の枠内で解決できることはたくさんあるわけです。例えばこういった女性患者の場合、家族立ち会いのもとでなら診察することができる。それから、女性の医療関係者ならば、自由自在に診療ができる。ですから、初めのころは女性のワーカーをたくさん送り出しました。女性の看護師さん、お医者さん、検査技師などが行きまして、大活躍いたしました。

これを人権問題にまで仕立て上げて排撃するという人々に対して私たちはこういいたい。そんなに女性患者が心配なら、あなたが連れて行って面倒をみってくれるなら、私たちもあなたの方の言葉を信用しましょう、と。現地で面倒をみざるを得ない私たちとしては、やっぱり限られた枠内で、この患者さんたちにとって最も幸せな状態は何なのかというのを探って行動する。これが臨床医学というものではないかというふうに思っております。

犠牲者 200 万人に難民 600 万人

私がまいりました 1984 年は、アフガン戦争の真っただ中でありました。アフガン戦争というのは、思い出していただきたいのですけれども、1979 年の 12 月。当時、世界最強の陸軍といわれたソ連軍の精鋭部隊約 10 万人が大挙してアフガニスタンに侵攻するという事件でした。その後約 10 年間、アフガニスタンは内戦の中に置かれました。このアフガン戦争で死亡した人は 200 万人以上といえます。アフガニスタンの人口の約 10 分の 1 が、この戦争によって抹殺されたわけです。

さらに 600 万人が難民となって、イランとパキスタンに逃れるという事態になりました。ペシャワール周辺にも、約 300 万人の難民が流入し、私たちも医療の立場からアフガン問題に巻き込まれていったわけです。

初めは、細々と難民キャンプで診療行為を続けておりましたが、ここで私たちは、ハンセン病コントロール自体が、実は先進国側の着想であって、現地には向かないということを悟りました。

ハンセン病が多いところは同時にほかの伝染病、感染症も多い。腸チフス、結核、マラリア、デング熱、アメーバ赤痢などの伝染病の巣窟であることが多いと同時に、こういったハンセン病の多発地帯は、ほとんどアフガニスタンの山奥の貧しい村々に集中しているということを知りました。片やマラリアで死にかけていっているのに、あなたはハンセン病でないから診ないというわけにはいかないのです。

それで、現地に即したやり方としては、内戦が下火になったころからは、山奥に診療所を出しました。一般の病気も一緒に診ながら、ハンセン病というのをことさら特別扱いせずに、感染症の一つとしてさりげなく診るという方針を打ち出した。アフガニスタンの無医地区における診療モデルをつくるということを、もう一つの大きな目標とするようにしました。

当時は内戦の最中でしたので、少しずつ診療所開設予定地の人々ときつきあいを深めていきました。

アフガニスタンとパキスタンの国境 2,400 km は絶対に閉鎖できないのです。無数の間道があります。人々は自由自在に出入りします。実はこれは、人工的に引かれた国境であったのです。私たちが地元の人々へ行けば、現地は客人をもてなすという気風が非常に強いところがあります。その客人が悪い人であろうと、いい人であろうと、一たん保護すると決めたら、これは何でも動かない。

こういった気風のところですから、地元のこういった慣習に逆に守られながら、自由に行き来しておったわけであります。

アフガニスタンでは最も高いところに住んでいる民族の居住地の一つにも、私たちは診療所をつくりました。日本人には考えづらい険阻な山岳地帯に集落があるのです。いまでもほとんどそこは変わっていない。首都カーブルというのは、彼らにとって非常に遠い存在です。外国のように遠いといってもいい過ぎではない。しかし、こういったところもアフガニスタンであります。ペシャワールから歩いたり、時々ジープに乗ったりして、1週間以上かかりました。しかし、これがアフガニスタンの普通の山村部の姿なのです。

日本といえばヒロシマ、ナガサキ

ここに行ったときに、私はフランス人と間違えられた。村長さんが出てきて、「あなたはフランス人ですか？」という。私はびっくりした。チャイニーズかジャパニーズかと聞かれることはよくありますけれども、フランス人というのは初めてだった。

後でこういうことだったと分かりました。実はこの村に入った外国人は私が最初で、どうもアフガン人じゃないみたいだから、たまたまフランスという国を知っていたので、そう村長さんは聞いたというのです。「いや、日本人です」というと、手のひらを返すように親切にしてくれました。単に日本人であるがために命拾いをする。単に日本人であるがために、仕事によく協力してくれる。こういうことが十数年前のアフガニスタンではごく普通にみられた。

日本というと、まず彼らが思い起こすのは、広島、長崎。これは単に原子爆弾でやられてかわいそうに、ということだけではなくて、その後、日本は見事に経済的に復興して、あの廃墟から立ち直った。彼らはよく知っているのです。羽ぶりの

いい国というのは必ず戦争をする。しかし、日本だけはこの50年間、一度も兵を外国に出したことがない。平和な国・日本という美しい誤解？ これによって対日感情のよさは支えられておったわけであります。それが6年前のアフガン空爆あたりから、180度変わりつつあるということは、皆さんにお伝えする価値があるのではないかと思います。

単に日本人であるがために、攻撃の対象になる。単に日本人であるがために誘拐の対象になるということが、少しずつ普通になりつつある。これは深刻な事態として受けとめていいのではないか。

ソ連軍撤収、難民の自力帰還

話を戻します。おそらくあそこはソ連領になってしまうだろう、衛星国になってしまうだろうと皆が信じてたら、ソ連は10年を待たずして疲れ果てました。撤退を開始したのが1988年の5月のことです。1989年の2月に全兵力が撤退いたします。その後、数年を待たずしてソ連そのものが崩壊するという事態に立ち至ります。

そのころも、アフガニスタンは世界的な話題になりました。アフガン難民が帰る、ソ連軍も帰る、アフガン復興が始まるということで世界中から救援団体が押し寄せました。内戦はますます激しくなる。ソ連、アメリカ、両方から武器援助合戦が続きました。1992年の4月、共産政権が倒れるまで続きます。

92年4月になって、地方に散っておった米国から軍事援助を受けていた各地方の軍閥が、我も我もと京の都カーブルに攻めのぼる。戦場が農村から都市に移る。都市の人は気の毒でしたけれども、農村はやや平和になり、都市では市街戦が日常化いたします。

こうして、パキスタンにおりました270万人の難民のうち200万人が、彼らはほとんど農村地帯

に住んでいる人たちでありましたけれども、こういう人たちがだれの手もかりずにアフガンへ帰るという事態が起こります。このことはほとんど世界に知られることがありませんでした。私たちはこれを待ってあったように、次々と診療所を建てていきました。帰ってくる難民たちを待ち受けるようにして診療活動を開始したわけです。

そうこうするうちに15年がたちまして、どうも先が長いということを悟りました。ハンセン病問題というのは、これはアフガン問題も同じですけども、みんなの関心があるうちは人も物も金も集まりますけれども、話題が去ってしまうと、うそのように消えてしまいます。

ハンセン病問題というのは長い長い年月を要するわけです。私たちの基本的な活動方針の原則の一つは、みんなが我も我もと行くときは、我々は行く必要がない。そこに必要性がありながら、だれもやらない分野、やらない場所で活動するというのが一つの方針であります。ハンセン病につきましても、患者はふえる一方なのに、次々と外国団体が去っていくという中で、我々ぐらいはここに何十年も残ってやろうということで、15年を期しまして病院を建てた。病院を建てたというだけでなく、現地に土着化するという方針をとった。現在、まさしくこの病院が移転を余儀なくされておりますけれども、私たちの基本的な考え方は変わりません。

私たちは、戦争と戦争の合間でサバイバルして活動を拡大してきたわけであります。ですから、この現在の混乱状態も、そう何十年も続くわけじゃない、やがてまた復活するであろうということで、現在、ジャジャラバードというところに移転を進めております。

こんどは大干ばつに見舞われる

さあ、今からというときに、本当に気の毒な国で、アフガニスタンを世紀の大干ばつが襲ったの

です。ものすごいものでありました。2000年5月になってWHO（世界保健機関）が警告した数字は、鬼気迫るものでありました。現在進行中のユーラシア大陸の大干ばつは、おそらく人類が体験したことのない規模で進行中である。その被災者は約6000万人。その中でも最も激烈な被害を受けているのがアフガニスタンで、国民の半分以上に相当する1,200万人が被災し、500万人がともに食えない状態だということです。さらに100万人が餓死線上にある。もうすぐ死ぬということです。そういう警告だったのです。けれども、これは国際社会の反応をほとんど得ることができませんでした。

私たちの診療所の周りでも、本当に村が消えていくのです。昨年まで緑豊かな水田であったところが、1年を待たずして、カラカラの乾燥地帯になっていく。村人がいなくなる。ゴーストビレッジといいますが、廃村がアフガニスタン中で広がっていったわけです。

餓死の末期というのは、決しておなかがペコペコになってばったり倒れて死んでしまうわけではない。たいてい栄養失調状態に陥りまして抵抗力が落ちる。そして簡単に赤痢だとか下痢症にかかりまして、コロリと死んでしまう。犠牲者はほとんど子どもでした。

当時、診療所はこういった下痢症の子どもであふれていました。時にはお母さんたちが何日も歩いて診療所へやってくる。生きてたどり着くのはいいほうでありまして、外来で並んで待っている間に、自分の子どもがお母さんの胸の中で冷えて死んでいくという光景はほぼ日常的にみられたわけです。それを考えますと、餓死者100万人というWHOの数字は、決して誇張ではなかったと私はいまでも思っております。

子どもたちは汚い水をつい飲んでしまうのです。台所の生活排水なんかも飲んでしまう。そのために下痢症にかかりやすい。下痢にかかって体力が

落ち、免疫力が低下したところで、脱水症でコロリと死んでしまうということなのです。

飢えや渴きは薬では治せない

私たちは残った村人たちを集めました。医者があることをいってはいけませんけれども、飢えや渴きというのは、これは薬では治せない。いくら膨大な抗生物質を買い込みましても、きりがないうのです。やっぱり食べ物と清潔な水さえあれば、病気のほとんどはかからないものでありました。私たちとしましては、まずは清潔な飲料水の確保だということで、残った村人たちを集めまして、かれた井戸を再生する。清潔な飲料水源の獲得という活動を開始したのが、2000年の7月のことでありました。これが現在も地道に続けられています。ことし4月現在で1,500カ所を突破いたしました。これによって数十カ村、30数万人の人々が、ともかく自分の村を離れずにすむことができた。そういう大きな仕事になったわけです。

農耕をしなければ彼らは食えないわけでありまして、私たちとしては農業用水の獲得ということにも大きな力を注ぐようになりました。

山岳地帯に行きますと、伝統的にみられるかんがい方法はカレーズと呼ばれるものです。これは簡単にいいますと、横井戸であります。山の斜面を真横に掘りまして、ちょうど坑道のように掘って、その水を引き出してかんがいをする。イランではカナートと呼ばれるものです。けれども、診療所周辺の渓谷に約40カ所のカレーズがあったのですが、名前はカレーズですけれども、これはかれるのです。私たちは、このカレーズの再生を行いました。40カ所のうち38カ所の再生に成功いたしました。

その成果というのは、それを手がけた私たちが驚くようなものでありました。2000年7月の診療所付近の状態は、1木1草もなく、木も立ち枯れているという状態でした。こういうところに

早目に水を注いでやると、半年もたたないうちに、見事にこれが回復する。この7カ月後、翌年の2001年2月には緑の草地になったのです。

水さえあれば、水が出たといううわさを聞いて、村人たちは帰ってくる。そして、自分たちの生活を始める。これが私たちが初めて知った事実でありました。難民帰還計画というのも必要かもしれませんが、農村の干ばつの場合は、そこで人々が生きていける条件を整えてやれば、郷土に強い愛着を持つ彼らは、自然に帰ってきて自分たちの生活を始めるんだ、ということを知りました。

これによって帰ってきたのが約800家族、9,000人でした。診療所もこれでまさに命を取り戻したわけです。

「救援」でなく「制裁」がやってきた

私たちは初め、こんな悲惨な状況が世界的な話題にならないはずがないと思っていました。それまでは細々とではありますけれども、力を尽くして待っていようということでありました。が、やってきたのは国際救援ではなくて、国連制裁だったのです。2001年の1月になりまして、国連はアフガン制裁を発動いたします。当時の日本人として、これに関係しておったのは大島さんでした。大島さんは当時のタリバン政権とも交渉を続け、それなりの見識のあった人であります。が、国連制裁による影響は少ないという大島さんの期待を裏切りまして、これは非常に大きな影響があったわけです。

どういうことかといいますと、前年の2000年の10月にペルシャ湾岸で停泊中のアメリカの駆逐艦が自爆攻撃に遭う。アルカイダというテロ集団によってやられる。それをかくまっていたのが当時のタリバン政権でしたので、それに対する制裁として発動された。

実際にはタリバン政権というのは、国際テロ組

織とは資金面ではつながりがあっても、本質的にかつての国際共産主義運動のような国際性というのは非常に少ない団体です。どちらかという国粋主義的な団体です。アフガン国粋主義とっていい。接点は単にイスラム教ときいうだけのことでありましたが、国連制裁というのは決定的な意味を持ちました。

先にアフガニスタンというのは地方自治が非常に徹底している国だということをいいましたけれども、一般の民衆にしてみますれば、中央がしかした不始末のために何で我々が食べ物まで断たなければいけないんだ、という思いです。それで、外国人排斥のムーブは一挙にアフガニスタン中に広がった。

実際にはタリバンのグループといいまして、私たちとほぼ似たような考えをする普通の支持者から、極端な狂信的な人までいろいろあります。けれども、タリバン政権の中で国連制裁をきかけといたしまして、過激な主張が主流になってくるわけです。そのために、バーミヤンの仏像破壊も起きた。仏像を破壊して、自分たちの信仰の純粹さを示そうという狂信的な考え方だったのです。

さらに9月11日になりますと、もう一つの狂信的なグループによるニューヨーク・テロ事件が発生します。すると、もう翌日からアメリカの敬虔なキリスト教徒であるブッシュ大統領はアフガン報復爆撃などということを発言するということになります。10月にアフガン空爆が実際に開始されます。

余談になりますが私は、実はキリスト教徒で、ブッシュ大統領と同じ南部バプテスト教会のクリスチャンです。ブッシュ大統領が報復爆撃などということをいうのは、私には、信じられなかった。聖書には報復するなということは書いてありますけれども、罪のない人まで巻き添えにして行うような爆撃を奨励するような言葉はどこにも出てこない。しかも、十字軍なんていう物騒なことは一

言も聖書に出てこないわけです。私はキリスト教の普通の一人として非常に恥ずかしい思いをいたしました。

1,800トンの小麦粉と食用油 20万リットルを

それはともかく、私は、いまアフガニスタンに必要なのは爆弾ではなく、緊急なのはパンと水の問題であるということを訴えました。2001年の10月から緊急食料配給を開始いたしました。日本人々に呼びかけまして、約7億円の募金が寄せられました。このうち約1億円を使って、1,800トンの小麦粉と食用油 20万リットルを餓死寸前の人々に届けました。

あの当時、日本中、あるいはアメリカ中がおかしかった。テロ対策というと、何でもかんでも容認されるようなムーブが支配しておったと思います。私が爆弾どころじゃないんだ、現地は飢えて死にかけている人であふれているんだということをいうだけで、中村はタリバンのスポークスマンだと、口の悪い人はいった。ブルカをかぶるのがよくないことだというのに対して、いや、あれは現地の文化ですからという、タリバンをかばうのか、タリバンのシンパだといわれました。

こういった風潮が、自主的にあるいは強制的に言論を封殺する一つのムーブが当時支配しておったという気がしてならない。そういうふうに分めつけられるものですから、みんな口を閉ざしてしまう。政治的にこういう発言をしてはまずいということで、本音がいえないというムーブが支配しておったのを覚えております。

ともかく空爆下、20名の志願者、私たちの職員が志願しまして、配給が行われました。当時、日本で軍事評論家と称する人々が、ピンポイント攻撃というのは、人道的な攻撃であって、テロリストだけをやって一般市民は殺傷しないんだ、というようなことをまともな議論として取りあげていた。そのことに私は憤りに似たものを感じた

わけであります。日本中がテレビにかじりついて、まるでテレビゲームでもみるかのように、爆弾が落ちる場所をみている。あのピカッと光る瞬間に、あれは上からみた落とす側の映像でありまして、その下におる人はたまったものじゃない。ピカッと光るたびに何十人、何百人の人が死んでいるという、想像力に欠けておったのではないかと、私は正直いって思うわけであります。

ともかく、その中で20名の職員を送り出すということは、一発の爆弾で20名が全員死亡するということも十分考えられるわけです。私は志願者を3つの部隊に分けました。たとえ1部隊が全滅しましても、ほかの2つの部隊は任務を敢行するようにという厳命を出しました。一時危ない時期もありましたけれども、無事餓死寸前の人々に食べ物を届けることができたというのは、うそのような本当の話でございます。

これによって、ご理解いただけますように、現地の活動というのは、決して私一人が頑張っているというのではなくて、こうして同胞のためには命もいとわない勇敢なアフガン人、それから、これを支える約2万名の良心的な日本人たち、こういった気持ちが一つになって、私たちの事業が動いているということであります。

「解放・映像」の後のアフガン

その後、アフガン解放という映像が繰り返し流されてくる。ここで、世界中がものの見事にこの映像によってだまされた。11月になって、タリバン政府及びその主力がカーブルからすうっと撤退

確かに撤退でしょうけれども、本当に一夜にして消えるという計画的な行動がありました。その数日後、米軍の支援になる北部同盟がカーブルに進駐する。米軍が入ってくる。

そのころ流された映像は、悪の権化タリバンが倒され、絶対の自由、不朽の自由と正義を持つアメリカ及びその同盟軍を歓呼の声で迎えるカーブ

ル市民たち、ブルカを脱ぐ女性たち。こういう映像が繰り返し流された。その後いろいろあったけれども、戦争は悪いことだけれども、これで落ちついたのかなあ、という錯覚を残したまま、アフガニスタンは国際社会から忘れ去られていった。これが真相ではないかと私は思います。

この6年間に何が起きたか。農村では現在、ケシの花が普通に植えられるようになりました。この6年間でアフガニスタンは、世界の非合法麻薬の93%をわずか一国で供給する不名誉な地位に転落してしまった。いろんなものが確かに解放され、自由になりましたけれども、まず自由になったのはケシ栽培の自由。それまで絶滅に瀕しておったケシ栽培は、タリバン政権の崩壊とともに爆発的に自由になりまして、ケシ栽培の自由が解放されたといっても過言ではない。

さらに、都市では女性を解放するはずでありましたが、女性が売春をする自由。それから、空爆で夫を失った奥さんたちが街頭で乞食をする自由。飢えた農民たちが餓死する自由。それから英語が流暢で、外国人に取り入るのが上手な、おべっか上手のアフガン人たちがますます豊かになっていく自由。これらが解放されたといっても、私はいい過ぎだとは思いません。おそらく、99%のアフガン人たちはそう思っているでしょう。ただ、それをいうと、自分の命が危ない。タリバンという烙印を押されて抹殺される、という恐怖で黙っているだけであります。

私たちはいままで方針を変えたことはないし、これからも変えないつもりです。これまで行ってきた活動を地道に続けているわけであります。新たに加わったものといえば、とにかく食料自給率の増加。これをしないことには、アフガニスタンという国は消滅してしまうというのが、私たちの危機感であります。もちろん教育支援が悪いといっているわけではない。教育も必要だし、道路も必要だし、放送も必要ですけども、それ以前に

人々が生きていかななくてはいけないということであります。乾燥に強いものの作付及び普及というのを目的といたしまして、6年前に試験農場を開きました。少しずつその成果があらわれつつあります。

サツマイモとソバが有望です

サツマイモとソバが有望であります。これは乾燥に強く、カロリーも高いということで有望です。サツマイモが案外うけました。こっちがいいと思っても、相手が本当に受け入れるものでなければ、自然に広がっていかない。いろいろやってみましたが、お礼はいわれるけれども広がらないというのが実態でした。が、3年前から種芋が盗まれるようになってくる。これはしめたものでありまして、2年前に私は一計を案じまして、サツマイモというのは、つるからもふやせるので、つるを盗んじゃいかんという立て札を立てました。翌日からつるが盗まれるようになるということで、すごい勢いで広がっていております。これもやっと6年かかって築き上げたひとつの成果であります。

ソバの栽培をしても、日本人みたいにそれをツルツル食べる民族ではないのです。ソバ粉を小麦粉と混ぜまして、一緒に練って焼くようにした。これで香ばしいナンが焼ける。主食が焼けるということで、これも少しずつ広がりをみせつつあります。

この干ばつはおそらくおさまらないだろうというのが、私たちの見方であります。地球温暖化が続く限り、このヒンドークシの白い山の雪が解け続けるであろうというのが予測であります。しかも、恐ろしいことに、地下水さえもかれつつあるというのが現実です。先ほど1,500本の飲料水を確保したといいましたが、その1,500本の井戸のほとんどは、2回、3回と再掘削しています。水が下がり、再掘削して、水が下がりとい

うことでやっと確保されている1,500本なのです。

カレーズを含めた地下水の有効利用というのは、おそらく今後は成立しないだろうと思わざるを得ません。残るは、雨水を主とする地表水の有効利用しかない。となれば、中小河川については、雨水ができるだけ急激に流れ落ちないように無数のため池をつくって対処し、インダス川主流の大河川からは大きな用水路を引いて、乾燥地帯を潤す。この2本立てでしかアフガニスタンの人々が生きていく空間を確保することはできないということです。それで第1弾として、2003年の3月19日、ちょうどイラク攻撃の前日だったのでよく覚えておりますけれども、全長20キロ、第1期工事分13キロに着手した。4年前のことでありました。

以後、現在まで、私は医者の仕事もしましたけれども、ほぼ現地に張りついてこの仕事を続けてきました。こうやって一挙に4,000ha以上を潤そうというわけです。こういった地域が次々と広がっているわけです。

かつては豊かな牧草地帯で、一部には水田もみられた地域が、この十数年をかけて、少しずつ乾燥化して砂漠化していった。こういうところがアフガニスタン中でみられるわけです。

そういう仕事を始めましたけれども、山の中ですから、日本のようにゼネコンを中心とした大手の建設会社があるわけではない。初めのころは、水が来るらしいといううわさで戻ってきた難民たちのつるはしとシャベルが主力でありました。だから地域住民と一体になってつくった水路であるということができると思います。

大活躍の江戸の農業土木技術

水路をつくりましても、何でもそうですけれども、外国人はやがて出ていく。外国人が出ていきましても、自分たちでメンテナンスできるものでないと、これはむだとはいいいませんが、非

常に難しいわけでありまして、自分たちでもメンテナンスできる技術といたしまして、日本の技術を大幅に取り入れました。日本の技術と申しまして、大体日本の中世末期、武田信玄のころから江戸中期に完成した日本の農業土木技術、これが現地で大活躍したわけでございます。

蛇かごと呼ばれるかごをつくりました。正確にはふとんかごといいますけれども、長さ2 m、高さ1 mのかごの中に石を詰めまして、主に護岸に使用するのです。600 トンのワイヤーを使って、この4年間で1万5,000個の蛇かごが生産しました。現地の農民が技術を習得しまして、現在では、熟練工といえるほどになりました。

日本の農業土木技術はすごいと思ったのは、これはどんな土石流が入ってきてもびくともしない。針金が何十年か後にはさびて落ちましようけれども、柳枝工といいますが、柳の木を13キロの間に約13万5,000本植えました。3年もたつと6 m以上に成長し、根をびっしり張るのです。たとえ一部針金が破れましても、根がこの石を抱き抱えるようになる。無数の細かい根が生えてくるので、針金が崩れてもこの石垣は残る。これは江戸時代、戦国時代の人々の偉大な知恵です。

明治維新以後、日本は西洋の文物を取り入れて、これだけ優秀な国になったというふうに教えられましたけれども、日本人は明治維新以前にも非常に優秀な民族であった。私は右翼ではありませんけれども、昔の日本人の考え方というものは、これは捨てがたいものであるということを改めて知りました。

米軍ヘリの機銃掃射を受ける

この4年間、手術場にも行きましたけれども、主には外で大地を相手に手術をしておりました。土木作業員として先頭に立って働いてきました。時々、襲撃にも遭いましたけれども、襲撃したのは地元住民ではない。米軍のヘリコプターが私た

ちを、遊び半分なのか、あるいは敵と認識してなのか、機銃掃射していく、ということにも遭いました。地元住民からはただの一度も襲撃されたことはありません。それは地元住民と一体となって仕事をしているからであります。地元住民といったって、タリバン支持者もいれば、反タリバンの人もいるし、軍閥の部下もいるという中で、農民同士はお互いの立場を知っていても、それで争うということはほぼないのです。私たちは住民と一体になって仕事を進めているので、私たちを守ってくれるのは住民なのです。皆さんの中にも次のように勘違いしておられる方もあるいはおられるかもしれません。あそこにタリバンという悪いテロリストグループがいて、アフガン復興の妨げをするので、軍隊を出して復興を守っているのだ、と。そんなに、実は住民もタリバンも分かりやすいわけではないのです。

こう考える人々は、カーブルの大都市のオフィスにしかいない人々であります。現場をほとんどみたことがない。実態は、テロリストがいるから復興が妨げになるということではなくて、外国軍がテロリスト掃討に行くから、そこが戦地になって、ますますややこしくなっているというのが実態です。このこともぜひお伝えしたいと思います。

ただの一度もテロリストと称する人々から攻撃を受けたことはありません。外国軍から攻撃を受けたことは何回もあります。しかも重要な活動拠点であった診療所が、それまで何にも問題がなかったのに、米軍が進駐したためにそこが戦場になって、活動をやって行けない状態になった。奥地の2つの診療所を放棄せざるを得ないような状態になってしまった。これが実態です。

私たちは、抽象的なことはよく分かりません。憲法がどうだとか、国際法がどうだとか、国際社会がどうだとかは、よく分かりません。けれども、実態は、アフガン人は、自分のためになることであれば喜んで協力し、攻撃することはないという

ことです。隣で軍用道路をつくっておいたトルコの会社、それからインドの会社はしばしば誘拐を受けました。私が覚えているだけで6件ありましたが、すべて死体となって発見されました。

ものものしい護衛をつけておりましたが、その護衛が現地農民の一部であるということもあって、だれが敵やら味方かわからないというのが、アフガン農村の実相であります。

私たちは、こういうふうにして地元の人々と仕事を進めております。時々、物騒なこともあります。ある日、この機銃掃射を受けたときに、さすがに地元の人々が怒りまして、今度米軍のジープが来たら、インダス川の中に彼らの装甲車をたたき込むというのです。そういうときには、みんなをなだめなくてはいけない。「私はとめないけれども、そうしてもいいから、とにかく大事な水路ができてからそれをやってくれ」といいますと、それまでいきり立っていた人たちが思い直してくれるのです。「そういえば、うちは子どもが多いし、早く水を通して、みんなを食わせなくちゃ。母ちゃんも、いつ水が来るの、頑張れよといっておった」ということなのです。それで振り上げたこぶしは、下におりるのです。

アフガンの農村といったって、武士と百姓が未分化な社会であります。農村の農民、成人男子がすべて兵員だということさえできるのです。こういった社会の中で、私たちが、あした日当を倍出すから武器を持って集まれというと、1,000名ぐらいの部隊はつくれるのです。しかし、あえて武力によらずに、平和的な手段で平和を実現するということが可能だということを、私たちは実証しようとしているわけであります。

現地は渇水と洪水のダブルパンチ

一つの背景になっているのは、日本農業土木の技術の勝利です。現地は渇水と洪水のダブルパンチなのです。取水堰で活躍したのが日本の農業土

木技術の優秀さです。筑後川に、かつては全国にありました斜め堰と呼ばれるものがありますが、この優秀さというのは驚くべきものです。大洪水が来ても、非常な渇水状態になっても、ほぼ一定の水量が得られるという見事なものであります。これが現地で大活躍し、そういうことによって私たちの安全も守られているのです。

ため池も実験的にあちこちにつくりました。みんな、そんなことすると土手が破れて大水になるということで、つくりたがらなかったですが、できるということを実証いたしました。これも今後ふやそうとしています。

九州の熊本と八代にあります十連樋門をコピーしたのもつくりました。水道橋です。2年前からかんがい開始されて、第1期工事がことしの4月に終わりました。第2期工事でさらにそれを延ばしますが、10月現在で約2,000haの荒れた農地を潤すほどの豊かな水源地帯になりました。

かつて、砂漠であったところなのです。こうやって緑が次々と現地によみがえってくる。難工事もありましたけれども、現地の人々の努力、それから日本人の我々のご先祖様の知恵を借りまして、仕事は進んでおります。

みんな喜びました。緑がよみがえったために数万人の人々が帰ってくる。もし、4,000ha、5,000haのかんがいが可能になりますと、10万人以上の人々を養える空間ができるということでもあります。

護岸技術も、これは江戸時代のものを採用しました。石出し水制というものです。インダス川の激流は並みの川の水勢ではない。日本の一級河川の数十倍は流勢が強い。日本のこの土木河川技術というのは、ほんとに目を見張るものがあります、見事に水路決壊を防ぎました。

水と緑の回復が平和を

こうやって、かつて立ちすくんで呆然と眺めて

おった荒野に、緑がもどる。私たちは、この水と緑の回復こそがほんとに平和をもたらす力になると信じて、工事を続けています。

暗い話ばかりしましたけれども、アフガンの人たちがみんな暗い顔をしているかという、そうではない。日本人のボランティア・ワーカーのほうが暗い顔をしている。これはなぜだろうかと思っていましたけれども、なくするものがない人たちの楽天的な気持ちというのが確かにある。あの子たちはあす、病気で死ぬかもしれませんけれども、死ぬまで明るいですね。

私たちは、この23年間を振り返りまして、もちろん、困ったところを助けてあげなきゃという思いあがった気持ちがなかったわけではありませんけれども、いま考えてつくづく思うのはこういうことです。この仕事に従事してよかったなあ、と。どういうことかといいますと、どんな極限状態にありましても、人間が最後の最後まで失っていけないものは何なのか。逆に失っていいものは何なのかということについて、一つの大きなヒントをそこから得たような気がするからなのです。

「情けは人のためならず」といいますけれども、こうして私たちは地元の人々と一体になりまして、本当に人間にとって共通に必要なもの、そして、これだけは人間として守らなくてはならないルール、これをともに探るということで、今後も日本人の良心的な事業として継続していきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

<質疑応答>

中井良則企画委員（司会 毎日新聞論説委員）
どうもありがとうございました。皮切りに、ちょっと私から質問します。多分ここにいる人みんな、このことを聞きたいと思うので、うかがいますけれども、日本政府がやろうとしているインド洋上での給油の継続、対テロ新法というものがいまありますが、これについてのお考えをお聞かせくだ

さい。

中村 私は実は法律のことはよく知りませんが、あのとき我々を機銃掃射した米軍の油がインド洋から来ているということであれば、これは、ああいう空爆による殺戮行為が殺人罪としますれば、民法に置きかえて考えると、殺人幫助罪に相当するのではないのでしょうか。これは殺人罪と同等の重い罪であると思えます。これが私のように撃たれた側の考え方、感じ方でございます。

伊波新之助（朝日出身） NHKのテレビで中村さんが、一生懸命石を運んで、水路を現地の人とつくっているのを見て、とても感動いたしました。きょうもその成果を直接うかがいまして、感激いたしております。日本人の誇りだと思えます。

ところで、現地の、いままでの日本政府の支援は、ハイテクのような技術を持って行って、それから、大きい土木工事なんかの技術者も現地の人じゃなくて、外国の人をみんな連れて行って、大型機械を動かすのはみんなアフガンの人じゃなくて別の国の人だ、ということを経元の政府の人もいっております。道路なんかも立派なのをバーンとつくるんですけども、後々、現地の人があつても修復できないようなものの援助が多いと思うのです。やはり最初は、現地の人を雇って、のろのろでもいいから、そして、そこに給料を渡したりして、そういうふうになっていくほうが、民生のうえからも、技術の援助からいいんじゃないかなというふうに思いますけれども、いかがでしょうか。

中村 そのとおりなんですね。それに請負制度というのがありますが、請負にまかせますと、貧しい人々にお金落ちない仕組みになっている。

何か仕事をするというのはいいのですが、まず地元の人がメンテナンスできるような施設に

するということが大事です。学校の建築一つにいたしましても、現地で一般的なのは、青空学級に近いものなんです。だから、建物そのものよりも学校制度が続くソフトといいますか、中身が続くようにすることです。

現在行われておる援助の実態というのは、これは国連、国際的に有名なNGOも含めまして、お金を主に動かす仕事が多い。実際に足で、現場でみて、自分たちで指揮するという活動は少ないのです。たとえ書類上ではよくても、実態をみると、とても地元の人たちが修復できないものだったり、あるいはそんなにお金はかからないはずだ、という事例がしばしばあります。

いい過ぎかもしれませんが、外国人に取り入って仕事をもらう人たちがますます金持ちになっていく、という構図が普通にみられる。私たちの作業員も1日の日当は240円でありますけれども、これでも数日間は家族が食っていけるぐらいの額なんですね。こうして、なるべくお金がみんなに落ちるように、みんなというのは普通の人々に落ちるような配慮をするというのは、もう少しあってよかったんじゃないかと私は思います。

金子敦郎（共同出身） 先ほど、中村さんは、ヘリコプターに襲われた、と。そのヘリコプターのガソリンが、あるいはインド洋からの給油によったんじゃないかというようなことをいわれたんですが、地図をみましても、アフガニスタンは非常に危険な状態になっているといわれるパキスタンの国境を接する、大変な内陸国なんですよ。内陸国のアフガニスタンあるいは国境地帯のテロ活動を阻止するための、インド洋での給油活動というものが、一体どういうふうにつながっているのかというようなことを、現地で活動していて感じているのか。日本のこの給油活動が、プラスかマイナスか分かりませんが、どういう形で貢献しているのか。あるいはつながっているというようなことを実感されているのか。

中村 実感することはほとんどありません。あまりに離れているわけです。カルザイ大統領も、このテロ特措法が日本で話題になっているということを聞いて、初めて、「あ、そうだったのか」と。インド洋上で給油があったのかというのを知ったぐらいですから、直接、それが目にみえることはありません。

ただ、国境地帯における空爆というのは、ものすごいものがあります。たまたまこの間、ブット元大統領が戻ってきたときに、百数十名が死ぬということがありましたが、あれぐらいの規模の死亡者は、空爆によって日常的にいまパキスタンの自治区で生じております。

地上軍を繰り出すと、地上軍が攻撃を受けて、国内で反戦運動が盛んになるので、空から攻撃するということが一般化しております。だから、わずかに少数の武装勢力に対しても、大げさにヘリコプターを。ヘリコプターも、撃墜されるようになったので、今度はジェット機で空爆する。

例えばこの記者クラブに、だれか警察に追われている人が数名いるとすると、このビル全体が爆撃にさらされるような、そういう事態が日常化しているということは、あまり知られていないんじゃないかと思います。

そういう状態の中で、油がどこから来ているのかというのは見えませんが、少なくともそういった攻撃の一部が、日本からの油の供給によっているということになれば、我々としてはおもしろくないわけであります。その心情的なものをいっているわけで、それが決してみえるわけではありません。

しかも、この洋上で麻薬船と称して、堂々と物資を運ぶような船はあり得ないわけです。そういうのは貨物に紛れて運ばれるわけですね。しかも、現地で、私がみる限りは、アルカイダというのは国際テロ組織で、かつての国際共産主義運動のよ

うに国際的な広がりを持っておりますけれども、少なくともアフガニスタンにいる、主な武装勢力というのは、アフガン国粋主義といったほうがいい。あのタリバン運動が、アフガニスタンを越えて世界に広がるというのはまず考えにくい。実はアメリカ社会、ヨーロッパ社会の病的な部分がテロリストを生み出しているのははっきりしております。テロ実行犯の経歴をみますと、ほとんどが先進国で教育を受けたエリートたちであります。筋違いもはなはだしいというのが実感であります。

さらにつけ加えていきますならば、これは私がいったのではなくて、あのアメリカから立てられたカルザイ大統領自身の発言ですが、昨年の秋ごろまでの戦費が、テロリスト掃討作戦に使われたお金が 600 億ドルで東京会議で決まったお金が 300 億ドルなんです。これだけのお金があったら、アフガニスタンはもっとまじな国になったのではないかということを、ほかならないカルザイ大統領自身が堂々といった。

しかも、水面下では動きがあって、旧タリバン政権の閣僚であるザイーフ大使、それからモトアキル外相などがいまカブールにいるんですね。そこで、交渉しているという状態なんです。カブールは現在、500 万人に人口が膨れ上がっております。大半が農村からたたき出された、食うや食わずの飢餓避難民たちです。火をつければ容易に爆発する状態であります。首都カブール自体がもう面のレベルで包囲されている、ということもあります。これも日本にはよく伝わっていないんじゃないかと思います。

この期に及んで、小田原評定に近い まあこういう言い方は失礼かもしれませんが議論が日本で進行しているということに対して、私はあんまりかかわり合いたくない。これが本音です。早く帰って、用水路の 1 キロでも延ばしたほうが、これはよっぽど意義があると私は思っております。まあ、いらんことをいいましたけれど

も、それが実感です。

牧野信彦（朝日出身） アフガンでは、情報はどういう形で伝播されるのか。あるいは彼らの間で交わされるのでしょうか。先ほど広島、長崎のことなどもよく知っているという話もありましたが。

中村 どうやって国際情勢が彼らの間に知れ渡るかということ、一つは、もちろんうわさというのはあります。けれども、彼らが最も信頼するメディアは B B C です。案外知られてないですけども、これは昔からそうなんですね。ラジオが主に国際的な情勢を知る手段でありまして、一仕事終わって、一息つくころ、B B C ニュースを聞くというのが彼らの楽しみになっている。案外我々より知っているんですね。

A B C だとかほかの放送には目もくれずに、B B C 放送を聞きます。だから、案外、国際情勢には詳しい。B B C というのは、私もよく知りませんけれども、各国語に翻訳して、かなり正確な情報を流すんですね。

私がひとつ感心したのは、空爆の直後、B B C がイギリスにとって不利な情報を流したんです。それでイギリス政府が B B C に圧力をかけようとしたとき、B B C は「とんでもない。そんなことをしては我々の放送、報道者としての誇りを失う」ということで、それを突っぱねたことがあった。それでさらにアフガンの人々の信頼を得まして、どんな山の奥に行っても、B B C 放送を聞いて実態を知ることができるんです。

広島、長崎に関する情報につきましても、これは世代から世代へ。親から聞いてそう思う、ということもあります。時間がなくていいませんが、日露戦争というのも有名なんですね。100 年前、極東のとるにたらぬ小国が、アジアの国々が欧米列強の植民地の支配下であえいであった時期に、ロシアに勝ったという、そのうわさが代々

伝えられているのです。日本は、どんなに相手が大きくてもぺこぺこしない、不撓不屈の日本という美しい誤解が生じて根をおろしている。しかも戦後の灰じんの中から復興して、どんなに羽ぶりがよくても戦争に訴えない。相手がどんなに強くてもぺこぺこしない。こう思ってくれているのです。私たちにいま求められている理想像を、彼らは親から子へ語り伝えてくれているのです。そう私は理解しております。

話がそれましたけれども、そうやって、普通はラジオを通して、BBCニュースを通して知っているんです。日本人の我々もびっくりするぐらいよく知っているんですね。非核三原則なんていうのも有名なんですよ。日本人の若者でさえよく知らないのに。日本は武器はつくる能力はあるけれども、決してこれを外国に売ったり、出したりしないんだというのは、案外知られているんです。

そういう意味で、対日感情というのは、非常にいいものがまだ残っております。これはやっぱり私たちのご先祖様の遺産であって、大事にしないではいけないと、現地にいてつくづく思うんですね。

百瀬和元（朝日出生） タリバンとアルカイダというか、テロリストグループがごっちゃになって論じられるようになってしまったんですけども、アルカイダという外国人勢力は、いまもなおアフガニスタン、それから最近ではパキスタンに相当な規模いるというふうに伝えられているんですが、どんなふうにご覧になっているのでしょうか。

パキスタンの国境地帯では、パキスタンの地元の人たちと、それから外国人勢力との対立なんかも、先ほどおっしゃったBBCなどがしきりに伝えたりしておりますけれども、アフガン国内に、外国人がどの程度入り込んでいるような感じを持たれていますか。

中村 これも、いいポイントです。先ほどいい

ましたようにタリバンとアルカイダは本質的に違う。一方は国際共産主義運動に類似した、あるいはアメリカの提唱するグローバルスタンダード、世界中を画一化しようとする運動に近いわけであります。これはグローバリズムの陰の部分として考えてさしつかえないと思います。けれども、タリバンに至りましては、彼らの世界の中心はアフガニスタンで、世界中がパシュトー語をしゃべり、アフガン服を着ていると思っているような人たちです。とても国境を越えて、彼らの思想を拡大するということはありません。これは国粋主義運動に限りなく近いということで、本質的に違うわけです。

おそらく、タリバン結成のときにかかわったサウジアラビア、CIA、それからパキスタンの諜報とは、武器支援なんかである程度の接点はあったろうけれども、本質的に違うというのが一般的なアフガン人たちの理解であります。

主にパキスタン国境地帯に潜んでおるのは、チェチェン、それからタジキスタン、ウズベキスタンの、いわば国際的な、まあ何をもってテロリズムというかは別として、武装勢力であります。これは現地では一般的にいて、アフガン人にとっても迷惑なものと受け取られております。

特にアフガニスタン、パキスタンにおきましては、ともに対アラブ感情は極めて悪いのです。

それを考えますと、どうもアルカイダという人たちが、お金を持ってきたり武器を持ってきたりするんで、アルカイダという団体がもっているというよりは、彼らのお金ももっているという節があるわけです。あまりアフガン人一般が親密な感情を抱いているとは思えません。

ただタリバンについては、先ほどいいましたように非常にアフガン国粋主義的な要素を含んでおります。その割合はともかく、反タリバンも含めまして、タリバン的な要素は切っても切っても消

えないということです。そのあたりが分かりにくい点の一つではないかと思います。

分かりやすくいえば、和服を着たり、げたを履いたり、みそ汁を飲んだりというふうなことをしている人を、皆、テロリストと呼ぶのかというと、決してそうではないでしょう。その辺の理解、分析不足が一つの悲劇を生み出しているんじゃないかという気がしてならないわけであります。

私が知っているのはその程度で、アルカイダと称する人に対する人々の評判というのは極めて悪い。迷惑なお客様という感じなんじゃないかな。それが普通だと思います。

青木隆直（北海道新聞） 日本ではテロ特措法の話、いわゆる新法ですね、その問題と、一方では民生支援というようなこともいわれているんですけども、お話は、アフガンの農民の立場に立った、その視点での支援を考えてほしいということだったと思います。いま、そういった中で、日本政府が具体的にできることというのは、どういうふうなこととお考えでしょうか。

中村 アフガニスタンにとって、いま最大の危機は、地球温暖化による砂漠化です。これは十数年を待たずして、国土の半分が消えてしまうということでもありますから、それに対する恐怖は並々ならぬものがあります。

それで、私たちが最もできる有効な協力というのは、言葉はいろいろありますが、平和な農村の復興、食料自給率の増加、これがアフガニスタンで最も緊急、かつ最も重要なことではないかというふうに思われます。そして、それは可能だということです。

現に私たちの水路の上のほうでも、現在、イランが大きな計画を立てまして、全長約 60 キロの用水路、運河の計画を立てている。計画段階ですけども、それは何も I S A F だとか、そういうの

を通さずにイラン一国でやっている。

日本政府自身も武装解除のプロセス、評価は別といたしまして、とにかくそれをやれたという実績があるわけです。小規模でも、何かできるものはあるということですね。

ただし、首都がすでに反政府勢力に面の実効支配で包囲されているという状態なのです。ですから、私たちの用水路の周りでも、何か事があるなら、我々はためらわずに反政府勢力の保護下に入ります。そうしたほうが安全なんですね。

そういった状況になっているというところで、例えばどこに水路を通して、どういうふうなルートで、どういうふうな形で、どういった地域でというのは、それなりの調査が要るわけです。決してそれは慌てることはない。まず表明するだけでいい。我々は、アフガン国民の生存に全力を尽くすんだという意思表示をして、まず調査する段階ではないかと思います。

日本人は気が短いんですよ。これをやらないのならほかに何をやるんだということになりがちです。そういう議論ではなくて、まず何をするかよりも、何をしてはいけないかを考えるべきです。これは国を荒らしてはいけない、人を殺してはいけない、ということでありまして、「我々は戦争プロセスに一切関与しない」ということを表明するだけでも相当なインパクトがある。それをなぜかだれもいわない。

N A T O 諸国にいたしましても、ドイツ、フランス、イタリアなどのいわゆる旧欧米列強を除きますと、嫌々軍隊を出しているというのが実態であります。軍隊を出さないと外交上立場がまずいとか、E U の中で発言力が落ちるだとかいう思惑の中で動いておるわけでありまして。ほとんどの国ではもう、帰れるものなら早く帰りたいと思い始めた。

日本が、うちはそういう戦争プロセスに関与し

ないんだということは、表向きは非難を浴びましても、多くの国の人々に対して、良心的な人々に、相当なインパクトを与える。まず何をしたらいいか。戦争プロセスに一切かわらない、再建だけにかかわる、という意思表示をするだけでいいと思います。

その後、具体的な調査を入れる。教育も重要ですが、願わくばかんがい事業。何とか砂漠化した地域に緑を取り戻し食料自給率を増加させたい。これを図らないと、アフガニスタンの復興というのは永久にないと思いますけれども、とにかく、その調査に時間をかけて行い、実行する。これがいま、とり得る最大のことでないかと思います。

慌ててクソをつかむ必要はない。もう首都が包囲されているという、面の実効支配が実現しているという中で、これをやめたらじゃ何をするんだという議論を聞いていると、日本人はあまりにもせっかちなという感じがしてならないわけであります。

質問 中村さんの偉大なお仕事は、みな寄附で賄われていますね。信念として、日本政府のお金を入れることを一切拒否されているのか。もう一つ、日本政府に対してアフガンの問題でいろいろ提言をされていると思うんですけれども、どういう反応なのか。

中村 いや、よく分かりませんが、いろいろ評価が分かれています。極端な人々は、あれはタリバンのスポークスマンだという。積極的に私たちを支援すべきだという方々もおられますが。

私たち自身は、そういった政治性を一切入れないというのが原則です。結果的にある政治的な動きに有利な発言になることはあっても、あらゆる政治的な動きとは無関係に動く。中立性を保つ、ということが一つのスタンスです。

私自身は、政府からお金をもらっても構わないと思います。ただし、自由に使わせていただきたいということがあるんですね。ところが、そうもいかないというのが政府の立場なんですね。悪いことをする人もたくさんおりますから、予算枠を決め、そして予算をとるには専従を何人も置いて、書類をたくさん書いて、書類を提出して、ということになります。ですが、これは私たちの組織の事務能力を越える。これが一つ。

かつては郵便ボランティア基金というものがありまして、これは厳密にはODAではありませんけれども、約4分の1を公的資金に仰いでいたことがありました。だから、政府がどうのこうのだと、私たちはこだわりません。乞食がお金をくれようとも、大金持ちがお金をくれようとも、とにかく無節操に、だれからでもお金をもらおうというのが私たちの方針の一つであります。これは日本政府がくれてもいい。ただし、もらうことの不利な点が多いということで、ちょっともらうまいということであります。

どうしても政府からお金をいただきますと、もちろんいい仕事もたくさんありますけれども、むづかしいことにも直面するのです。私たちの場合は、募金というか、基金を出してくれる人たちの意図を反映するものでないといけなわけですね。具体的にいわないと分からないのですが、こういう仕事というのは、現地に行って、さあこれを始めようとしたら、どうもこれは違うということも多いのです。それで現場でやっぱりこうしたほうがいいんだと決心したときに、政府のお金だと小回りがきかないということがあるんですね。医療資金として例えば1億円をもらった。ところが、どうも医療どころじゃないぞ、抗生物質を5,000万円買うよりも、井戸を200本ばかり掘ろう、ということもあるんです。私たちの仕事では。

あることを決めますと、それをその目的のために消化しないと、次の予算がおりない。先ほどN

GOがあまりよくない結果を生んでいるということをいいましたけれども、決してNGOの人が悪いわけではないんですね。次の年の予算をもらうためには、そのお金を出してくれる人が喜ぶようなりポートを出さないと次の年のお金がつかない、ということが悪循環となっておるわけであります。もちろん、政府が「おたくを信用するんで、ここに100億円あるから好きに使ってくれ」というのなら、私は1円の不正もせずに使ってみせます。

しかし、それだけの太っ腹の政権が出てくるような気はしませんし、とりあえずは、日本の良心に頼ってやっていくのが、結局、いまのところは一番いい方法なんです。大きな資金を国連や政府に仰いでいたら、いまのような仕事はできなかったのではないか、と思うわけであります。決して、政府や国連を、私たちは敵視しているということではありません。その辺はひとつご理解をお願いします。

(文責・編集部)

中村 哲(なかむら・てつ)

ペシャワール会現地代表、PMS(ペシャワール会医療サービス)総院長

1946年生まれ。73年九州大学医学部卒。78年6月、福岡県の登山遠征隊の同行医師として、パキスタンに初入国。83年にペシャワール会発足。84年5月から同会のミッション病院に勤務し、ハンセン病の治療にあたる。87年1月から、パキスタン北西辺境州のアフガン難民キャンプへの巡回医療を開始。94年11月、ペシャワール会がペシャワール・レプロシー・サービス(PLS)病院を設立。2000年7月、アフガニスタンで大干ばつの被害が広がり、同会は井戸の掘削など水源確保事業を開始。01年6月、ダラエヌールで灌漑用大井戸着工。02年、「緑の大地計画」を発表し、ジャララバードに医療、水源確保、農業のプロジェクトを統括する事務所を設立。03年、マグサイサイ賞・平和と国際理解部門受賞。

ペシャワール会

中村医師のパキスタン・アフガニスタンでの医療活動を支援する目的で結成。福岡市に事務局を置き、会報の発行、情報発信、募金活動やワーカーの現地派遣などを行っている。入会や寄付、ワーカー派遣についての問い合わせは事務局(下記)へ。

事務局

〒810-0041

福岡市中央区大名1-10-25

上村第2ビル603号

電話：092-731-2372

ファクス：092-731-2373

eメール：peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

ホームページ：

<http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/index.html>